

雪の夜

野村胡堂

一

銭形平次が門口の雪をせっせと払っていると、犬っころのよう
に雪を蹴上げて飛んで来たのはガラッ八の八五郎でした。

「親分、お早よう」

「何んだ、八か。大層あわてているじゃないか」

「あわてるわけじゃないが、初雪が五寸も積っちゃ、ジツとして
いる気になりませんよ。雪見と洒落しやれようじゃありませんか」

そう言う八五郎は、頬冠りに薄寒そうな擬まがい唐棧とうざんの袷、尻を
高々と端折って、高い足駄を踏み鳴らしておりました。雪はすつ
かり霽はれて、一天の紺碧こんぺき、少し高くなった冬の朝陽が、真っ白な
屋根の波をキラキラと照らす風情は、寒さを気にしなければ、全
く飛出さずにはいられない朝でした。

「たいそう風流なことを言うが、小遣でもふんだんにあるのか」
「その方は相変らずなんで」

「心細い野郎だな。空ッ尻けつで顫えに行こうなんて、よくねえ量見
だぞ」

「ヘッヘッ」

「いやな笑いようだな、雪見に行こうてエ場所はどこだ」

「山谷ですよ」

「山谷？」

「山谷とうぜんじの東禅寺横で」

「向島とか、湯島とか、明神様の境内なら解っているが、墓と寺

だらけな山谷へ雪を見に行く奴はあるめえ、——そんなことを言って、また誘い出す気なんだろう」

「図星ツ、さすがに銭形の親分、エライ」

八五郎はポンと横手を打ったりするのです。

「馬鹿野郎、人様が見て笑ってるじゃないか。往来へ向いて手なんか叩いて」

「実はね親分、山谷の寮に不思議な殺しがあったんで」

「あの辺のことなら、三輪の兄哥あにいに任せて置くがいい」

「任せちゃ置けねえことがあるんですよ。殺されたのは吉原の佐野喜の主人弥八ですがね」

「あ、因業いんごう佐野喜の親爺か、この春の火事で、女を三人も焼き殺した楼うちだ。下手人が多過ぎて困るんだろう」

「多過ぎるなら文句はねエが、三輪の親分は、たった一人選よりを選んで田圃たんぼの勝太郎を挙げて行きましたよ」

「えッ」

田圃の勝太郎は、まだ二十七八の若い男で、もとは八五郎の下っ引をしていたのを、手に職があるのに、岡っ引志願でもあるまいと、今から二年前、平次が仲間に奉加帳ほうがちょうを廻して足を洗わせ、田圃の髪結床かみゆいどこの株を買って、妹のお糸くめと二人でささやかに世帯を保持っていたのでした。

「妹のお糸が飛んで来て、けさ三輪の親分が踏込んで、兄さんを縛って行ったが、兄がゆうべ一と足も外へ出なかったことは、一つ屋根の下に寝ていたこの私がよく知っている。夫婦約束までした嬉し野が焼け死んでから、兄さんはひどく佐野喜の主人夫婦を怨うらんではいたが、そんなことで人なんか殺す兄さんでないことは、

八五郎さんもよく知っていないさるでしょう。銭形の親分さんにもお願いしてどうぞ兄さんを助けて下さい——とこう言う頼みなんです」

「何んだ、そんなことなら早くそう言やいいのに」

「それに三輪の親分だが、——殺しが知れてから半刻経たないうちに下手人^{げしゅにん}を挙げたのは、自分ながら鮮^{あざ}やかな手際だったよ。銭形が聴いたらさぞ口惜しがるだろう——つて言ったそうで」

「そんなことはどうでも構わない、出かけようか八。お静、羽織を出しな」

「有難い」

八五郎はすっかり有頂天になって、平次の先に立って犬っころのように雪道を飛びました。

二

山谷の東禅寺横、田圃と墓地を左右に見て、二三軒の寮と少しばかりのしもた屋が建っておりまして。その中で一番洒落たのが佐野喜の寮で、左手は奉公人達が息抜きに来る別棟^{べつむね}の粗末な離屋。裏には三四間離れて、植木屋の幸右衛門の家があり、南は田圃に開いた見晴しで、平次が行った時は道だけは泥濘^{ぬかるみ}をこね返しておりましたが、田圃も庭も雪に埋もれて、南庇^{みなみびさし}から雪消^{ゆきげ}の雫^{しずく}がせわしく落ちてゐる風情でした。

銭形が来るという前触れがあったものか、番頭の万次郎は心得て門口まで迎えます。

「御苦劳様でございます。親分さん」

「三輪の万七兄哥が念入りに調べたそうだが、後学のために、俺もちよいと見ておきたい。仏様はどこだえ」

「へエ——、御検屍の御役人様方がこの雪でまだお見えになりますので、そのままにしてあります。どうぞ此方へ——」

万次郎は先に立って、狭いが確りした梯子を二階へ案内しました。こんな商売によくある、垢^{あかぬ}抜けのした五十がらみ、月代^{さかやき}も、手足もいやにツルツルした中老人です。

「フーム」

二階はたった一と間、唐紙の中へ入った平次は思わず眼を見張りました。六畳の半分をひたして血の海、その真ん中に贅沢な床を敷いて、主人の弥八は殺されていたのです。

「こんな恐ろしいことになりました。親分さん方」

番頭は部屋の隅にヘタヘタと坐って、死骸から眼を外^そらせます。あまりの凄まじさに、正視出来ない様子です。

「主人はこの家に一人いるのか」

「いえ、お鶴という子供が一人、手廻りの用事を足して、この家に泊っております。夜が明けると、あちらの別棟^{べつむね}から下女のお吉や、下男之音松が参りますが、御主人はせっかく寮へ来て休んでいるんだから夜だけでも静かな方がいいと仰しやるもので——」

番頭の話聴きながら、平次は念入りにその辺を調べました。主人は寝込んだまま、一刀の下にやられたらしく、脇差が喉^{つらぬ}を貫き、蒲団までも突き抜けて、畳へ切っ尖が達しております。

「大変な力だね、親分」

八五郎はちよつとその柄^えに触って舌を巻きました。

「まさか槌^{つち}で叩き込んだんじゃあるまいな。柄頭^{へづ}を見てくれ」

と平次。

「何んともありませんよ」

金具には髪の毛ほどの疵もないところを見ると、やはり馬乗りになって力任せに突き通したものでしょう。

「青梅綿の蒲団を二枚通すのはえらい力だな」

「こいつは天狗でなきや怨霊ですぜ、親分」

「馬鹿なことを言うな」

そうでなくてさえ、この春の火事には、延焼して来る火の手を眺めながら、大金の掛っている十幾人の妓おんなに逃げ出されることを惧おそれ、納戸に入れて鍵をかけたばかりに、三人まで焼け死ぬような無慈悲なことをして、世間から鬼のように思われていた佐野喜の弥八です。怨霊に殺されたなどという噂が立ったら、その日のうちに瓦版かわらばんが飛んで、来月は怪談芝居の筋書になるでしょう。

「戸締りは念入りだな」

「へエ——、主人は大層やかましく、申しました」

と万次郎。

平次は立って雨戸の工合を見ましたが、何んの変化もありません。尤も外からコジ開けるにしても、切立った二階窓で下からは足掛りも手掛りもなく、隣の植木屋幸右衛門の二階窓とは同じ高さで向き合っておりますが、三間以上離れておりますから、羽がなくて飛付く術すべもないわけです。

その隣との間の雪の上に、たった一箇所小さい穴のあるのは、上から物を放ったか、鳥が餌を探しにおりたのでしょう。手摺てすりの雪は雨戸を躁るとき大方払い落された様子です。

「脇差は誰のだい」

「主人の品でございます。用心棒の代りに、この二階の床の間に
おいてあった筈で」

そう説明されるとなんの手掛りにもなりません。

「ゆうべ主人の様子に変わったことはなかったのか」

「へエ——、別段変わったこともございませんでした」

「主人はちよいちよい此寮へ来るのか」

用心堅固に口を緘^{つぐ}む番頭の万次郎から、いろいろのことを引出
すのは、相当の骨折^{ほねおり}です。

「滅多に参りません」

「それはどういうわけだ、もう少し詳しく話してくれ」

「お神さんがこの夏この寮で亡くなってから、あまり良い心持が
なさいませんようで、一度もいらつしやいませんでしたが、近頃
ひどく疲れたから、せめて二三日休みたいと仰しゃって、きのう
久し振りでお出でになりました。私はお供をして参りましたよう
なわけで、へエ」

「お神さんも、変死したのではなかったかい」

平次は佐野喜のお神さんが、春の火事で焼け死んだ妓共^{おんな}の祟^{たた}
りで自殺したという噂のあったのを思い出しました。

「へエ——」

「それを詳しく聴こうじゃないか。ね番頭さん、お前さんはたい
そう用心しているようだが、前後の経緯^{いきさつ}を詳しく話してくれない
と、罪のないものが罪を被ることになるよ、——これは物の譬だ
が、あの大雪の中を忍び込んで、この二階へ迷いもせずに登って
来た上、これだけの恐ろしい力で主人を刺せるのは、よく案内を
知った男だ」

「ヘッ」

万次郎は胆を潰しました。疑いは真つすぐに自分を指していることに気が付いたのです。

「どうだ、隠し立てなんかせずに知っていることは皆んな話して見ちゃ」

「申します、親分さん、——お神さんは、この夏の末普請ふしんが出来上ってホツとしたから、骨休めがしたいと仰しゃって、この寮へ来て泊った晩、急に気が変わったものか、下の部屋の梁はりに扱帯しごきを掛けて首を吊って亡くなりました」

「その時は誰が一緒だったんだ」

「私は参りません。離屋の方に下女のお吉と下男の音松が泊り、この寮にはやはり小女のお鶴がおりました」

たしか
「確に自殺だったのか」

「間違いはございません。三輪の親分さんも、御検屍のお役人様方もそう仰しゃいました」

「そのお鶴というのに逢って見よう」

「呼んで参りましょうか」

「いや階下へ行こう」

平次とガラッ八は、狭い梯子はしごを踏んで下に降りました。そこは店の方から駈け付けたらしい人間で調べも何も出来ないほど一ぱいです。

「皆んなにしばらくの間、向うへ行って貰おうか」

その人数を別棟の方に追いやって、平次は小女のお鶴を呼出しました。

「お前はお鶴というんだね」

「へエ」

「怖くなかったかい」

「――」

平次の調子があまりに穏かなのと、その言葉の奥に優しく慰^{いた}わる響があるので、お鶴はびっくりして顔を挙げました。お鶴の想像していた御用聞という概念^{がいねん}とはおよそ心持の違った平次です。

十四五にもなるでしょうか、なんとなく目鼻立の悪くない方ですが、発育不良らしく痩せ衰えた上小柄^{こがら}で青白くて日蔭に咲きかけた雑草の花のような感じのする小娘です。

「お前の親許はどこだ、――幾つで何年奉公している」



平次は一ぺんに三つの問いを投げかけました。

「川崎在でございます。二年前十三の時、十九になる姉と二人で奉公に参りました」

お鶴の答えの要領のよさ。

「姉はどうした」

「この春の火事で亡くなりました」

「そうか」

泣き出しそんなお鶴の顔を、平次は憐れ深く見やりました。たぶん姉妹二人、よくよくの事情で女衞ぜげんの手に渡り、年上の姉は佐野喜の店で勤め、年弱で身体も萎いじけきっている妹のお鶴は、寮の下女代りにこき使われていたのでしょうか。

「姉が死んで口惜しいと思わないのか」

「口惜しいと思いました——でも」

弱くて若い女の子に、それがどうなるものでしょう。お鶴は口惜しさも涙も隠そうともせず、俯うつ向いて前掛に顔を埋めるのです。

「両親はないのか」

「父親は五年前に亡くなり、母親は病身で親類の家に厄介になつております」

平次はすっかり考え込んでしまいました。この日蔭で干し固めたような少女には、弥八を殺す動機がないとは言えません。

「主人はお前によくしてくれたのか」

「——」

「給料はいくらだ」

「——」

お鶴は黙って頭を振りました。因業佐野喜は決して結構な主人

でなかったことはよく解ります。

「ゆうべ皆んな別棟べつむねに引揚げたのは何刻だ」

「お吉さんが引揚げたのは戌刻いっく（八時）頃で、番頭さんはそれから間もなく引揚げました。雪の降り出す前で――」

「それっきり寝てしまったのか」

「は、いえ、按摩あんまさんが来ました」

「どこの按摩で、何んという」

「玉姫の多の市という人で、よくこの辺を流して歩きます。御主人様が昼のうちに往来で逢って約束なすったそうで、亥刻半よっはん（十一時）頃雪が降り出してからいきなり入って来ました」

「揉もませたのか」

「遅いからもう止そうと断りましたが、多の市さんは依怙いこじ地な方で、こんな大雪にわざわざ来たんだからと、無理に入り込んで――」

「二階へ上がったのか」

「いえ、階下の八畳ちよつとで一寸揉んで貰いました」

「帰ったのは？」

「すぐ帰りました。子刻ここのつ（十二時）前だったでしょう」

「それから」

「御主人は二階へ行ってお休みになりましたし、私は階下で、何時ものように休みました」

「二階へは有明ありあけを灯けておくのか」

「油が無駄だからと仰しゃって、いつでもすぐ消します」

佐野喜の主人ともあろうものが、有明の種油を惜しむというのは、ちよつと常人に思い及ばないことです。

「ゆうべ主人は酒を呑まなかったのか」

「晩の御飯のとき二合くらい召し上りました」

「そんなことでよからう。ところで今朝の様子を話してくれ」

平次は話頭を軽く転じました。

「朝起きて見ると、お勝手口の戸が開いていて、外には大きな足跡が付いていました」

「確に戸は開いていたに違いあるまいな」

「え、——寒い風が吹込んでいました」

「八、雪の降り出したのは、何刻ごろだえ」

平次は八五郎を顧みました。

「戌刻（八時）時分から降り始めて、夜中にひどくなりましたよ」

「降り止んだのは」

「大降りだった割りに早く霽れたようですね。牡丹雪で二た刻ば

かりの間にうんと積ったんでしよう、寅刻（四時）前に小用に起

きた時は、小降りになってましたよ」

「すると、下手人は寅刻（四時）近くに出て行ったわけだな、——

その足跡には雪が降っていなかったのか」

「え」

「お勝手口は締め忘れたのか、それとも外からコジ開けたのか」

「三輪の親分さんは、鑿か何んかでコジ開けたに違いないと言

いました」

お鶴がそう言うまでもなく、お勝手の雨戸にも敷居にも、大きな傷のあることは、その間に家中を嗅ぎ廻っている、ガラッ八もよく見窮めておりました。

四

つづいて下女のお吉を呼んで調べましたが、大した役に立ちそうなおきもありません。

「何んにも知りましねエよ。けさお鶴さんに騒ぎ出されて、びつくりして飛んで行っただ」

三十二三のお吉は働くのと溜める外には興味のありそうもない、恐ろしく頑丈な醜女しこめです。

佐野喜へ奉公に来て六年目、平常ふだんは店の方にいて、主人が寮へ来るときだけ付いて来るそうで、何を訊いても一向筋が通りません。

「主人を怨んでる者があるだろう。お前の知っているだけの名前を言ってみな」

「皆んな怨んでるだ。私は給料が少くて仕事が多いし、番頭さんは朝から晩までガミガミ言われるし、音松爺さんは六十八になるが、国へ帰して貰えそうもないし、お鶴は姉の百代ももよさんが焼死んだし、勝太郎さんは嬉し野さんが死んだし――」

お吉は水仕事で太くなった指を折って、こう勘定するのです。全く際限がありません。

「近頃主人にひどく叱られた者はないのか」

「毎日目の玉の飛び出るほど叱られるから、慣れっこになって驚かないだよ」

「けさの騒ぎのときお鶴が離屋はなれに迎えに来たのか」

「いえ、大きな声をしたから驚いて駆け付けただ」

「お前が行くとき、雪の上に足跡があったかい」

「あつたようだよ」

それ以上はこの女の粗笨そほんな記憶を引出す術すべもありません。

「店中はともかく、世間の人が皆んな主人を怨んでいるわけじゃあるまい」

「そうだよ」

「一人くらいは怨まない者もあるだろう」

「お隣の幸右衛門親方だけは、ひどく有難がつているよ」

「それはどういうわけだ」

「娘のお歌さんの親許身請みうけのとき、唯みたいに安くして貰ったんだってネ」

お吉の話によると、植木屋幸右衛門はもと鳥越で大きく暮していたが、悪い人間に引掛ひかつて謀判ぼはんの罪に落されそうになり、身上しんしょうを投げ出した上娘のお歌まで佐野喜に売って、ようやく遠島は免まぬれましたが、その後お歌の歌川が病氣になり、勤めもできない身体になったのを可哀想に思つて、ひどい苦面で親許身請をし、この寮の隣の二階屋を借りて養生をさせましたが、重い癆咳ろうがいでとうとう去年の暮死んでしまったというのです。身売の時も知合いの佐野喜が思いきった金を出してくれ、病氣で親許へ帰る時は、世間の相場で三百両も五百両も積まなければならぬ歌川を、たった五十両で帰してくれた恩を、幸右衛門は今でも身に沁みて有難がつているというのでした。

「その幸右衛門は来ているのか」

「第一番に飛んで来て、いろいろ手伝っていたが、先刻帰ったようで」

その次に平次は、下男之音松に逢つて見ました。それはもう六

十八という老人で、腰も曲り、齒も残らず欠け落ち、ぼんのくぼに少しばかり白髪まげの鬚が残っている心細い姿ですが、多年の労働で鍛えた身体きただけはなかなか頑丈らしく、耳さえよく聴えたら、相当役に立ちそうな親爺でした。

給料の前借があるので、主人がなかなか川越在の田舎へ帰してくれないのが不平のようですが、それを除けば大した文句もないらしく、結局少女のお鶴とたった二人で、滅多に人の来ない寮の番人をしているのが、反って気楽そうでもあります。

朝からのことを一と通り話させると、

「いや驚きましたよ。何しろ私共のいるところからこの母屋おもやまで、五六間のところに大きな足跡が付いているんでしょう。お鶴が気が違つたように騒ぐから、二階へ上がって見るとあの始末だ」

「第一番にどんなことをした」

平次は爺やの耳元で声を張上げました。

「町役人とお店と医者へ行かなきゃならないから、まず隣の幸右衛門さんのところへ飛んで行って手伝いを頼みました」

「幸右衛門はまだ起きてなかったのか」

「平常ふだんは恐しく早い人だが、大雪の朝は寝心地が良いから、今朝にかぎって大寝坊だ。戸を叩いても容易に起きないのには弱りましたよ」

「幸右衛門の家から出るか入るかした足跡はなかったのか」

平次の気の廻ること――、ガラッ八はそれを聴きながら固唾かたずを呑みました。

「雪の中の一軒家のように、犬っころ一匹側へ寄つた足跡もねエ。五寸以上の雪だから、たった五六間歩くのに、足駄がめり込んで

弱ったね」

意味もなく語りつづける音松老人の言葉は、植木屋幸右衛門を遠く嫌疑の外へ追い出してしまいます。

「往来からすぐこの寮へ来た足跡はなかったのか」

「ありませんよ。もつと尤も往来から俺たちの休んでいる離屋はすぐだから、軒伝いに廻って来て、母屋のお勝手へ入れば別だが」

音松の説明は、全く他の者——例えば勝太郎のようなものでも、寮へ来ることの可能を証拠立てます。

「お勝手にあった足跡は足駄か草履か、それとも——」

「そこまで判らねえ、でも何んか齒の跡が見えたように思うが——」

はなはだおほつか覚束ない言葉です。

五

平次とガラッ八は、隣の植木屋幸右衛門の家へ顔を出しました。

「親方、飛んだ迷惑だネ」

平次はお世辞ものです。何にか昔馴染の家へ遊びにでも来たような心置きなさ——。

「へエ——、銭形の親分さんだそうで、御苦勞様で」

「俺の来ることが大層早く判ったんだね」

「お鶴坊がそう言って教えてくれましたよ。江戸で高名な銭形の親分さんがいらつしやると——」

「ハッハッ、そいつは丁寧過ぎて謝った。ところで親方、ゆうべは何んにも物音を聞かなかったかえ」

「何んにも知りませんよ。あれ程の騒ぎがあつたんだから五間と離れない私の家へ聞えない筈はないんですが、一杯飲んで寝たのと、大雪のせいでしょう。雪の降る晩というものは、不思議に物音が聞えないものですね。同じ屋根の下でも階下に寝ていたお鶴坊が知らないくらいですから」

静かな調子と重厚な感じの物腰が、この中老年人をひどく穏かにします。中老年人といっても佐野喜の主人と同年配の、せいぜい四十七八でしょうか、もとはよく暮したというのが本当らしく言葉の調子にも、身のこなしにも、何んとなく品格の匂う人柄でした。「ところでお前さんたった一人で暮していなさるのかい」

「へエ——、悪い月日の下に生れましたよ。女房に死なれた翌年、騙^{かた}りに引掛つて身上を仕舞い、その二年後には娘に死なれたんですから。天道様を怨む張合いもあります」

幸右衛門は長い眉を垂れました。この上もなく静かですが、動乱する心の中の悲しみは平次にもよく解ります。

「佐野喜を怨む筋はなかったのかい」

「最初は良い心持ではございませんでした。納得して金に換^かえた娘でも、親から見れば買^うい手が怨めしくなります。でも、二年目に病気になる、たった五十両で親許に帰してくれました。半年前に三百両で身請け話のあつた娘です」

「成程な」

「それから、お隣に住むようになって、寮へいらっしゃるたび毎に、何彼につけてお世話になりました。うまい物があれば届けて下すったり、良い医者があるとわざわざ差向けて下すったり、でも寿命のないものはどうすることも出来ません。長いあいだ患^{わず}つ

た揚句、親父の私をたった一人この世に残して去年の暮に亡く
なってしまうました」

娘のことという夢中になるらしい幸右衛門は、相手の身分の
忙しいのも構わず、すっかり自分の述懐に溺れおほきるのでした。

平次はそんなことで打ち切って、

「この家の二階から、寮の二階を見せて貰いたいが――」

「へエ、どうぞ」

自分で先に立って二階に上がると、幸右衛門は窓を開けて何ん
のこだわりもなく平次に見せました。

窓と窓との間は三間あまり、飛付くことなど思いも寄らず、締
めきって大雪が降っていたから、向うの物音が聞えなかったとい
うのも無理のないことです。

「八、向うの窓へ物干竿か、丸太を渡して歩けるかい」

平次は冗談らしく窓の下に立てかけた、植木の突っかい棒にす
る商売用の丸太を指しました。

「御免蒙りましょう、三足と歩かないうちにグラリと行きますよ。
それに、丸太は二三十あるが、向うの窓に届くような長いのは一
本もないし、一パイ雪を被って、引っこ抜いて使ったあともあり
ませんぜ」

「物の譬だ、――そんな手もあるまいという話さ。なあ親方」

平次は後に立って、酢っぱい顔をしている幸右衛門を顧みかえりまし
た。

それから念のため家の中と外廻り、隣との関係を見せて貰って、
外へ出ると、

「ところで八、あの番頭の身持と店中の評判を訊いて来てくれ」

平次はいきなりこんなことを言います。

「あの番頭は虫の好かない野郎じゃありませんか、あれが臭いんですしょう」

「そんなことは追って解るよ、——それから玉姫の多の市という按摩あんまに逢って、ゆうべの様子を訊くんだ。盲目めくらはカンが良いから、佐野喜の主人の身体を揉んでいるとき、何にか変なことがなかったか、曲者が忍んでいるとか、——主人が変ったことを言ったとか」

「それだけで？」

「それで沢山だ——俺は三輪の兄哥に逢って訊きたいことがある。頼むよ八」

「合点」

八五郎は踵かかとに返事をさせるように、もう飛出しております。

六

番所へ顔を出すと、三輪の万七とお神楽かぐらの清吉は、自分たちの手柄に陶醉して、すっかり好い機嫌になっておりました。

「お、銭形の。兄哥が来たという話は聴いたが、とんだ無駄足で気の毒だったな」

万七の鼻は蠢うごめきます。

「様子を見に来たんだか、——やはり勝の野郎が下手人だったのかい」

「まだ白状はしねえが、お白洲しらすで二三束打たれたら他愛もあるめえよ」

「証拠があるんだから文句は言わせねえ心算さ。東禅寺前で夜泣蕎麦そばを二杯も喰っているし——」

「刻限は」

「雪がチラリホラリ降り出した頃だというから、亥刻よつ（十時）少し前だろうよ。それから雪に濡れた草履が自分の家の縁の下に突っ込んであったし、手拭と袷くめを妹のお糸が火鉢で一生懸命乾していたのさ」

「草履？」

「真新しい麻裏だよ。——雪の降る前に飛出して、大降りになつてから帰ったんだろう」

「そいつは飛んだ間違いだ、もういちど念入りに調べ直してくれ。下手人は勝の野郎じゃないよ、兄哥と平次。」

「何んだと、銭形の、——まさか俺の手柄にケチを付ける心算じゃあるまい」

「飛んでもない」

「それじゃ手を引いて貰おうか。勝は八五郎の下っ引だったから、銭形の息は掛ってるだろうが、証拠のあるものを放って置くわけには行かねエ」

三輪の万七は屹きつとなりました。平次に対する反感で、逞たくましい顔がサッと青くなります。

「証拠？」

「勝は夫婦約束までした嬉し野が焼け死んでから、ひどく佐野喜を怨んで、折があったら仇を討ってやると、友達中に触れ廻り、腹巻には何時もあいくちヒ首を呑んでいたそうだ」

「殺した道具は脇差だぜ」

平次もさすがにムツとした様子です。

「手当り次第にやったのさ、匕首より脇差の方が都合がいい」

「真っ暗な二階で、よくそんな贅沢な道具を見付けたことだ。――

ね、三輪の。俺は兄哥と張り合いに来たんじゃねエ。どう考えても勝の野郎のしたことじゃないから、ツイ飛込んでお節介をしたまでのことだ。お願いだからもう一度調べ直してくれ」

平次はもう一度下手に出る気になったのです。が、三輪の万七は子分のお神楽の清吉の見ている前もあり、そう簡単には打ち解けそうもなかったのです。

「存分に調べたよ、この上調べようのないところまで調べたよ。それで勝をしょつ引いたが何うしたんだ」

「弥八が殺されたのはどう考えても亥刻半（十一時）過ぎだ、――下手人らしい足跡に雪が降っていなかったそうだから、引揚げたのは夜明け近くだろう。勝が山谷にブラブラしていたのは、亥刻（十時）そこそこだというじゃないか」

「それから曉方過ぎまでいたとしたらどうだ」

「あの大雪の中に一と晩立っていたのか」

「寮の中にいる術もあるよ」

万七は頑がんとして譲りません。

「それに、下手人の残した足跡は、足駄か高下駄だが、勝は草履をはいていたというじゃないか」

「穿はきかえたらどうする」

「まあいい、兄哥の言うのが皆んな本当として、――人を殺しに行く者が、夜泣蕎麦そばを二杯も喰えるだろうか」

「胆の据った野郎だ。呆れ返っているよ」

これでは手のつけようがありません。平次は尻尾を巻いて引退るより外はなかったのです。

「そう言わずに兄哥」

「気の毒だが勝は口書を取ってお係りに引渡すばかりになっ
ているんだ。助けたかったら、真物の下手人を挙げて来るがいい。
銭形のお手際を拝見しようじゃないか」

万七は子分の清吉を顧みてニヤリとしながら、自棄^{やけ}に煙管を
引っ叩きます。

平次は悄然として外に出ました。八五郎の面目のために勝太郎
を救う工夫は容易につきそうもありません。

田圃の勝床を覗いて見ると妹のお糸^{くめ}は浮かぬ顔をして客を
断っております。

「あ、銭形の親分さん」

「お糸、気の毒だなア」

「親分さん、兄さんは矢張り――」

「むつかしいなア」

「どうでしょう、私」

お糸は手放しで泣き出すのです。十九かせいぜい二十歳でし
うが、勝気らしい下町娘も、たった一人の兄が、人殺しの下手人
で縛られてはひとたまりもありません。

「お前がなまじっか隠し立てしたのが悪かったんだ。潔白なもの
なら何にも細工などをするのではない、――勝はやはりゆうべ山
谷へ行っただろう」

「え」

お糸はようやくうなずきました。

「帰って来たのは何時だ」

「雪が降り出してから——亥刻よつ（十時）少し過ぎでした」

「亥刻半（十一時）前に帰ったことが判れば、勝は下手人じゃない。証拠があるか」

「私が——」

「お前では証人にならない。誰か知ってる者はないのか」

「さア」

お糸はハタと困った様子です。

それからいろいろと訊ねてみましたが、勝太郎を救うような手掛りは一つありません。この上は、三輪の万七が挑戦したように、勝太郎以外の下手人を縛って突き出す外はなかったのです。

七

「親分、今帰りましたよ。あ、腹が減った」

ノソリと帰って来た八五郎は、火鉢の側へ膝行いざり寄ると、もうこんなことを言うのです。

「色気のない野郎だな、頼んだ仕事の方はどうだ」

「上々吉ですよ、その代り腹が減ったの減らねえの——」

「何がその代りだ」

「助けると思ってたまず五六杯詰め込こめまして下さい。頼みますよ」
八五郎の望のぞみに任せて、お静は膳こしらを拵こしらえてやりました。

「何しろ、あれから働きずくめで、水を呑む隙もねエ」

「能書はそれくらいにして、どんなことがあったんだ」

「佐野喜へ行って、番頭の万次郎のことを訊くと、いやもう滅茶滅茶。奉公人どもは主人の悪いところは、皆んな番頭の入れ知恵だと思い込んでいやがる」

「で？」

「店の金だって、どれだけくすねているか解ったものじゃありません。万次郎の荷物を調べて見ると、盗み溜めたらしい金が何んと三百両も隠してあるんだから驚くでしょう」

「それから何うした^ど」

「どんな顔をするか見てやろうと、荷物をもとのままにして、山谷の寮から万次郎を呼び返して見ましたよ。すると」

「――」

「店へ帰るといきなり、用事を拵えて自分の部屋へ入り、くすねておいた三百両のうち二百両まで持ち出して、店の金箱へ返すじゃありませんか。稼^{かせ}ぎ溜めた金なら、そんなことをする筈はない」

ガラッ八もなかなかうまいことに気が付きます。

「それから何うした」

「下っ引を呼びよせて、万次郎を見張らせ、あっしは玉姫の多の市のところへ行きましたよ。すると恐しい働き者で陽のあるうちから留守だ。仕方がないから行く先々を捜し廻って、按摩の笛の音をしるべに、ようやく捉^{つか}まえたのは日が暮れそうになってから、
――腹も減るわけじゃありませんか」

「無駄が多いなア、多の市は何んと言った」

「何んにも言やしません。あの家は年に二三度ずつお神さんを揉みに行ったきりで、主人を揉んだのは昨夜が始めてだそうで、お

神さんは療治代の十二文の外に一文もくれたことがないが、主人はさすがに豪儀だ、黙って二百くれたということ——」

「それっきるか」

「へエ」

「佐野喜が按摩あんまに二百文も出すのはどうかしていると思わないか、——俺が行って見よう。多の市に逢ったら、何にか変わったことがあるかも知れない」

「これから行くんですか、親分」

「まだ日が暮れたばかりだ。できることなら、勝の野郎を番所へ泊めたくねえ。お前は疲れているなら、ここで吉左右を待つ方がいい」

平次は手早く仕度をして立ち上がります。

「冗談でしょう、あつしが行かなかった日にや勝の野郎に済まねエ」

ガラッ八は熱い番茶をガブリとやると、口の中に火傷やけどをしながらもう足駄を突っかけております。

按摩の多の市を捜すのは、全く容易の業ではありませんでした。ようやく田町を流しているのを突き留めて、蕎麦屋そばへ入って一杯呑ませながら聴くと、十手より酒精アルコールの方が利いて、思いの外スラスラと話してくれました。

「佐野喜の主人は酒を呑んでいなかったのかい」と平次。

「へエ、酒の気もありますでしたよ」

多の市の答えはまず予想外です。

「何にかものを言っただろう」

「何んにも言わないから少し向っ腹が立ちましたよ。世の中には無愛想な人間もあるものだが、あんなのはありません。尤も二百も祝儀を出しゃ、石地藏を揉んだって腹は立ちませんがね」

「あのお鶴という小さい娘が取次いだのかい」

「へエ」

「療治の間主人は眠ってでもいたのかい」

「飛んでもない、心臓が悪い様子で、大変な動悸どうきでしたよ」

「外に何にか不思議に思ったことはないのか。揉んでいて何にか物音が聞えるとか、他の人間の気はいがするとか」

「そう言えば、佐野喜の主人ともあろうものが、お召物がひどく粗末でしたよ」

「それっきりか」

「もう一つ、あの人はもと職人が百姓をしたことがあるでしょうか、手がひどく荒れていましたか」

「フーム」

平次は深々とうなずきました。

八

「来いッ八」

「どこへ行くんで、親分」

「下手人げしゅにんが判った」

「番頭の万次郎ですか」

「いや、主人を殺すくらいな奴が、後ろ暗いことをしている筈はない。——お前に店へ呼び戻されてからあわてて錢箱へ二百両返

すようじゃ、あの番頭は悪い奴だが人殺しはしなかった」

「じゃ誰です、親分」

「今に判る」

平次とガラッ八が山谷へ行つた時は、寮はお通夜でゴタゴタしておりました。

「八、提灯を用意して来い」

「へエ——」

離屋へ行つて提灯を借りて来ると平次は八五郎とたった二人で植木屋の幸右衛門の家へそつと入つて行つたのです。

「何にをするんで、親分」

「探す物があるんだ」

「——」

平次はいきなり二階へ入ると、窓の張出しと手摺てすりを見ました。が、よく拭き込んで何んにもありません。隣の寮はお通夜のお経が始まったらしく閉めきつた中から陰気な読経の音が漏れます。

「これだ」

平次は勝ち誇ほこった声を挙げました。窓の下、畳の上に僅かばかり残った鋸屑おがくずを見付けたのです。

「鋸屑じゃありませんか」

「そうだよ、もう一つ捜すものがある」

階下へ降りて念入りに捜し廻ると、縁の下へ深く抛り込んだ切口の新しい一間ばかりの丸太が四本。

「占めたッ、もう大丈夫」

喜び勇む平次の眼の前に、何時どこから入つて来たのか、植木屋幸右衛門が、しょんぼりと立っているではありませんか。

「恐れ入りました、親分さん。勝さんが縛られたと聞いて自首して出る心算つもりでしたが、ツイ未練で遅れてしまいました。私を縛って下さい」

ヘタヘタと崩折れると、両手を後ろに廻うしてうな垂れるのです。「幸右衛門、——何んだってもう少し早く名乗って出なかつたんだ」

「一言もごいません。命が惜しかったのです、——親分さん、——この私でなく、若い者の命が——」

「よしよし、神妙の至りだ。お上にも御慈悲がある、——ところで、何んだって、弥八を殺す気になったんだ」

「今朝申上げたのはあれは、皆んな嘘うそでございます。私の娘のお歌は、弥八夫婦にいじめ殺されました。身体の弱い者に、無理な勤めをさせ、少しでも休むと、物も食わせないばかりか、犬畜生にも劣おとった折檻をされ、とうとうもう助からないという大病人になつてしまいました」

「——」

「そうなると、助からない病人の世話をして葬とむらいを出すのが馬鹿馬鹿しくなつて、私に五十両という大金を苦面させて、死骸同様の娘を無理強いに親許身請しやうもんをさせ、万一丈夫になつた時は、二度の勤めをさせるといふ証文まで取つて、ときどき医者をよくしました。鬼と言おうか、蛇と言おうか、あんな恐しい人間はありません。娘はそれを怨うらみつづけて血を吐きながら死んでしまいました」

そう語りつづけるうちに、幸右衛門は燃え上がる忿怒のやり場もなく、唇を噛み、拳を握つて、はふり落ちる涙を横撫でに払う

のでした。

「この夏お神さんの死んだのは——お前のせいではあるまいな」と平次。

「あれは全くの自害でございます。寮へ来て、あの窓から私の家の二階を見ると、さすがに娘に済まないと思ったのでしょうか。夜中にフラフラと死ぬ気になった様子です。——娘の怨みだったかもわかりません。——ところが主人の弥八はますます丈夫で、三人も妓おんなを焼き殺しても、虫を踏み潰したほどにも思いません。昨日などは私の顔を見ると、いきなり、お前の娘のお蔭で、大損をしたと喰くってかかる有様で——」

幸右衛門の憤激は果てしありません。

「で、昨夜、雪の降る前に寮に忍び込み、弥八が酔って寝たのを見すまして、二階で刺したのだろう。——帰ろうとすると按摩の多の市が来た。断つても依い怙こじ地で帰らないから仕様事なしにお前が弥八の代りに揉んで貰もらって、何んとはなしに口止めの心算つもりで二百はずんだ」

「——」

平次は描いて行く事件の段取りは、実際と寸毫すんごうの喰い違いもありません。幸右衛門は口を開いて聞き入るばかりです。

「帰ろうとしたが、ちょうど大雪が降っていて、足跡を隠しようがない。幸いお前が手掛けた寮の植木の突っかい棒にする長い丸太が、寮の二階窓の下に立てかけてあったのを思い出し、そこから丸太の尖につかまって、三間も離れている自分の家の二階の窓まで飛付いた。危い離れ業わざだが、それでもお前は高い場所の仕事に馴なれているから、どうやらこうやらうまく行った」

「――」
平次の推量の素晴らしさ、幸右衛門は自分のした事を復習されて、ただ呆氣に取られるばかりです。

「自分の家の二階へ帰ったが、四間以上もある丸太をそのままにして置くとたちまち露見する。お前はそれを二階へ引入れて、四つに切り落し、縁の下に抛り込んで素知らぬ顔をしていた。二階から二階へ丸太で橋を架^かけることは俺もすぐ考えたが、丸太を大地に立てて、二階から二階へ飛付くことは考えなかったよ」

「恐れ入りました親分さん。その通りに違いございません」

幸右衛門は板敷の上へ両手を突きます。

「ところで、雪の降る前にお前を誘^{さそ}い込んで、夜中過ぎ大雪になつてからお前を送り出し、窓を締めたり、お勝手口へ足跡をつけたりした人間がある筈だ」

「それは親分さん、勘弁してやって下さい。姉を焼殺された上、自分は牛馬のようにこき使われている可哀想な娘です。娘の母親は遠い親類の厄介になつて、生きるに生きられず、死ぬに死なれぬ目に逢つていると、この間も手紙が来たのを見て、私も貰い泣きをしました。――あの娘はただ戸を締めて、足跡をつけただけです。たった十五になつたばかりの娘が、姉の仇^{あだ}を討つ氣にでもならなければ、そんなことができるわけはありません。お見逃^{みのが}しを願います、親分さん。弥八を殺した下手人は私一人で沢山でございます」

幸右衛門は幾度も幾度も顔を床に摺り付けました。

「よしよし、何んにも知らなかったことにしよう。それから、俺に縛られたんじゃ、お前の命を助けようはない。見え隠れに八を

つけてやるから、すぐ番所へ駆け込みうったえをしろ、お係り同心が出役になっている筈だ。——俺に言われたなんて、間違っても言うなよ。佐野喜の主人にはお上の憎しみがかかっている。御慈悲でお前の罪が軽くなれば、遠島か永牢で済むかも知れない、そうするとまた娑婆へ出て来る折もあるだろう。——あの娘のことは心配することはない、俺が引受けて母親のところへ届けてやる」

「有難うございます。親分さん、神とも仏とも、——」
五十近い幸右衛門は恥も体面も忘れて大泣きに泣き入るのです。

隣の寮のお通夜の経はようやく済んだらしく、ザワザワと波立つような人の声が聞えます。

それを聴いたガラッ八の八五郎は、薄暗いところに引込んで、やたらと拳固で涙を拭くばかりでした。

平次の手柄に代えて幸右衛門は、佐野喜の主人の段々の不都合が知れて、下手人ながら江戸追放という軽い裁きさばを受け、平次が預かっているお鶴をつれて、川崎在のお鶴の母を訪ね、そのまま土着して安らかに暮しているということでした。これはずっと後の話。この胸の透すく事件のお蔭で平次は手柄も褒美もフイにしましたが、その代りガラッ八と一緒に呑んだ正月は近年にない明るいものでした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十六年一月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>